

いつもように朝のドッジボールを見ていると、低学年の男の子が高学年のお兄ちゃんに「本気で投げてよ」と叫んでいる。「本気！本気！」お兄ちゃんの強い球を受けてみたい。そんな小さなチャレンジャーに答えるお兄ちゃん▼そんな姿を見ながら、小学校低学年の時に大きなお兄ちゃんに交じってソフトボールに入れてもらっていたことを思い出した。「お前はここを守れ。」そう言われて守っていたのは、今考えてみれば、ファールグラウンドだった。ツーアウトで私の打順になり、当然三振するのだが、そういえば、チェンジになることはなかった▼自分の周りには、そんな素敵な上級生がたくさんいた気がする。そして、阿下喜小学校の運動場にもそんな素敵な上級生がいた▼上級生に交じって小さい子がコートの中を逃げ回っている。しかし実は上級生は小さな子を本気ではねらっていない。逃げ遅れて、近くにいる時だけ、軽く投げて当てる▼ねらいは「本気！本気！」とチャレンジャーな子である。上級生の強さを見せなければならない。ドッジボールコートには、そこに参加する子が満足する様々な仕組みがあった。考えられたものではない。本来人間が持っている特性なのだ▼彼らは、勝った負けたと言わない。いつも途中で終わるからかもしれないが、そもそも一人ひとりの欲求が違う。たった一つ共通しているとすれば「たのしい」のである。